On the Period of Exploration of the Author Colette

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松田, 孝江 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/143

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

大妻女子大学紀要―文系―　No. 44，平成 24（2012）年 3 月

作家コレット飛躍のときについて

松　田　孝　江

1. はじめに

20 歳のとき，結婚してブルゴーニュの片田舎からパリにやってきたコレットは，夫ウィリーの名のもとに出版した『学校のクローディーヌ』（1900）が評判を呼んで以来，生涯書くことをやめなかった。しかしコレットの人生は，作家以外にも様々な活動で彩られている。本稿では，ウィリーとの別れから二番目の夫ジュヴネルとの別れまで，すなわち 1905 年（32 歳）から 1924 年（51 歳）までの 20 年間を切り取り，主として作家からはみ出た部分に光を当てて，コレットの魅力に迫ってみたい。

2. 舞台役者の誕生（1906-1912）

コレットはいつ頃からか舞台に立つことを夢みていたらしい。パリの自宅やブザンソン郊外モンブッコンの別荘で，時おり機械体操に汗を流す姿が見られたのは，それに備えていたのかもしれない。1905 年にはジョルジュ・ヴァーグについて，パントマイムのレッスンを始めた。そして早くも翌年 2 月，テアトル・デ・マテュランでパントマイム役者としてデビューした。ミュージカルの後をしめくくる演目で，コレットの出番は多くはなかったが，出足は上々だった。3 月にはモンテカルロ，その後ブリュッセルでも舞台に立った。つぎに得た仕事は，せりふ付きの若い男の役で，テアトル-ロワヤルの舞台だった。

当時役者は，まともな人間がつく職業ではないと思われていた。特にコレットが演じるパントマイムは，客集めのためもあって露出度が高く，“良識ある”ひとびとのひんしゅくを買った。敬愛する詩人フランシス・ジャムには，舞台写真を一枚添えて，こういう道に入った今，お便りするのもはばかられます，と書いている[(1)]。

私生活では，夫ウィリーとの仲はすでに破綻していた。舞台に立ったのも，自活のために外ならない。1906 年秋には共同生活を解消し，ミッシーことモリニー侯爵夫人の近くに引っ越した。前年の 3 月に出会って以来，男装の同性愛者ミッシーに見込まれたコレットには，他に頼れる人もいなかった。二人はともにパントマイムに打ち込むようになる。

1907 年は，ムーラン-ルージュでのパントマイム劇「エジプトの夢」で幕が開いた。コレットが扮するミイラを，考古学者役のミッシーが発見する。ミイラはたちまち生き返り，考古学者に近づいて接吻する。そこで場内は騒然となった。幕がおろされても野次と怒号はやまず，攻撃は客席にいたウィリーとその愛人に向けられた。二人は警官に守られて必死の思いで脱出したのだった。翌日は演題を「東方夢想」と変更したうえで，ミッシーに代わってヴァーグが登場したが，騒ぎは一向に収まらず，公演中止になってしまった。ミッシーとコレットの親密な仲は，コレットが二番目の夫とめぐり会うまで続いてゆく。

コレットの役者生活は，娘を出産する前年の 1912 年まで 7 年続いた。出演した舞台はマイム劇だけでなく，せりふ劇やダンスなど，20 本近くを数えることができる。特にヒットした二つの作品を見てみよう。

もっとも人気を集めたのは，1907 年 11 月にパリのアポロ座で初演されたマイム劇「柔肌」である。シナリオはジョルジュ・ヴァーグとレオン・ランベール。山賊と暮らす美しい娘ユルカは，若い兵士を愛している。留守をねらって恋人を招じ入れていたが，ある日山賊に見つかってしまう。逆上した山賊の男は，若者を殺さんばかりに痛めつけて外に放り出す。男は娘に，なぜなんだ，説明しろと詰めよる。殺してやると，もみあっている最中，娘の衣服が裂け，左胸があらわになって，男ははっとする。震え上がって逃げる娘。絶望した山賊は，短刀でみずからの命を絶って果てる。

ヴァーグ扮する山賊に責め立てられてコレットの柔肌があらわになる場面で，観客はかたずを飲む。初演から 4 年間，「柔肌」の公演は途切れることがなかった。ブリュッセルでは，フォリー–ベルジェールのこけら落としに上演された。ジュネーヴ公演を告げる広告は，パリで 200 回上演されたヒット作，とうたっていた。この作品は 1908 年，ニューヨークのマンハッタン・オペラハウスにも登場したが，このとき出演したフランス人俳優は，クリスティーヌ・ケルフひとりにとどまった。当時のフランスの雑誌批評に，決して長い芝居ではないけれど，忘れ難い印象を与えるというものがある[2]。露出趣味だけにとどまらない迫力があったことは間違いない。

「柔肌」のつぎに受けた芝居は，「パリのクローディーヌ」だった。1902 年にウィリーが，原著『パリのクローディーヌ』（1901）を 3 幕ものの芝居に編んでいた。コレットはそれに少し手を入れたものを演じたのである。ウィリーの愛人ポレールのはまり役を，今度は“クローディーヌ本人”が演じるのである。一気に関心が高まった。初演は 1908 年 5 月，パリのパリジアナ劇場での幕開けだった。翌年コレットは，シャルル・バレが率いる劇団の地方巡業に加わり，4 月半ばから一カ月半の間に，32 都市で連続公演をこなした。「パリのクローディーヌ」はその後も各地で上演された[3]。

コレットの演技はどう評価されたのだろうか。素人で基礎がなっていないという意見と，素晴らしい素質の持ち主とする，二つに分かれた。パントマイムに限れば，師であり，共演者でもあったヴァーグは，コレットの強い味方だった。ヴァーグによればコレットは，なによりのみこみが早く，研究を怠らない。練習熱心で，開演は 10 時なのに，6 時頃から気になり始めるのだった。しかし当時としては大胆なコレットの舞台を，いたたまれない思いで見つめる人もいた。河盛好蔵氏は，ブリュッセルで偶然コレットの舞台を見たモーリャックについて記している[4]。

ブリュッセルにつくと，彼はこの初めての都会を，ひとりで，当てもなくほっつき歩いたが，夜，とあるミュジック・ホールに入ると，パントマイムの途中にコレットが舞台に現れた。彼女は 1873 年生まれであるからモーリャックより 12 も年上であるが，すでに『クローディーヌ』の著者として有名であり，彼女の『愛の隠れ家』はモーリャックの愛読の書であった。ホールの中では観客たちはビールを飲んだり，煙草を吹かしたりしてがやがやと騒いでいる。その煙の雲のなかでコレットは踊った。モーリャックは人々の笑い声や野卑な野次が自分のまわりに渦を巻いているのをきいて身のすくむ思いであった。彼は辛かった。コレットに向かって「ぼくはあなたを知っています。あなたが誰であるかを知っています」と叫びたかった。彼の外套をコレットの裸の肩にかけて，人眼につかない場所へつれてゆきたかった。

3. ジャーナリストへの道（1910–1924）

雑誌に連載した原稿がある程度まとまったところで，単行本として出版するという方式は，1904年以降コレットのいつものやり方となった。このようにして『動物の対話』（1904），『七つの動物の対話』（1905）が Mercure de France から，『ぶどうの巻きひげ』（1908）が La Vie Parisienne から出版された。しかしコレットがジャーナリストとして活躍する契機となるのは，日刊紙ル・マタン *Le Matin* への寄稿である。当時パリでは，*Le Matin*，*Le Petit Parisien*，*Le Journal*，*Le Petit Journal*，*L'Echo de Paris* の五大日刊紙が競い合っていた。なかでル・マタンは，1907年の発行部数65万部を，1913年には100万部までに成長させる。このとき首位にあった *Le Petit Parisien* の150万部には及ばないものの，二番手につけていた[5]。ル・マタンではアンリ・ド・ジュヴネルとステファン・ローザンヌが半月交代で主筆を務めていた。『千夜一夜物語』に社名の“朝 Le Matin”をかぶせて，“千と一の朝 Les Mille et un Matins”と銘打ったコラムの執筆者に，コレットを起用すると知らされたローザンヌは，「あんなサーカス女に書かせるなら辞任する」，と息まいた。波乱ぶくみのスタートとなった初めての原稿は，1910年12月2日の紙面を飾ったが，記事の末尾には仮面が付されていた。仮面が署名に変わるのは，5回目からのことである。折々のエッセイやニュースをないまぜにしたこの文芸欄にコレットが書いた短編は，隔週から毎週へ，時には中断することもあったが，総計で472編にのぼる[6]。コレットはジュヴネルの庇護のもとに原稿を書き続けた。やがて二人は親密になり，1911年11月には同居し，翌年12月に正式に結婚，1913年夏には娘が誕生している。

初期に書かれたメインテーマは，華やかな舞台生活の裏側にある厳しい現実を，コレット自身の体験をもとにルポルタージュ風に描いたもので，二年ほど続いた。このシリーズは『ミュージック・ホールの内幕』（1913）と題され，単行本としてフラマリオンから出版された。他方1904年以来，主としてメルキュール・ド・フランスに発表していた動物シリーズも，1911年以降，その多くがル・マタン紙に書かれるようになっていった。しかし主たる発表の場をル・マタンに移して以降注目されるのは，コレットがジャーナリストの道を歩み始めたことである。

コレットの母は，娘が新聞に書くことになったとき，不安をもらした。「ル・マタンと契約するのはいいけど，小説はどうなるの，書けなくなるよ。ジャーナリズムなんて，本当にきつい仕事なんだから」[7]。母シドのことばには実感がこもっていた。シドにはベルギーに二人の兄がいた。一回り以上も年の離れた兄たちはすでに亡くなっていたが，二人ともジャーナリストで，特に長兄は国の内外で高い評価を得たジャーナリストだった。

コレットのコラムには，得意の動物ものや，自伝的要素の濃い作品のほかに，現地取材による記事も登場した。ジャーナリストの本領ともいえるこうした記事こそ，これまでコレットが経験したことのない領域だった。コレットはル・マタンに書いた取材記事をもとに，二冊の単行本を上梓している。『長い時間』*Les Heures longues*（1917）と，『群衆のなかで』*Dans la foule*（1918）である。『群衆のなかで』は，1911年末から二年半にわたって執筆した短編のなかから，ルポルタージュもの16編を選んだものである。他方『長い時間』は，1914年夏に始まり，1918年秋まで続いた第一次世界大戦中に，新聞や雑誌に寄稿したもので成り立っている。37の短編のうち，24編がル・マタンに書いたものである。発売当時まだ戦争は続いていた。二作品の刊行順が，作品の内容と前後していることについて，コレット自身は何ら説明していない。当時の社会情勢を考慮したものとみられている。まだ平和だった時代に書かれた，『群衆のなかで』から，その内容を少し見てみよう。

大統領選挙（ル・マタン，1913 年 1 月 19 日付）

1 月 17 日，ベルサイユで大統領選挙があり，コレットは現地取材をした。パリから着飾った女性たちが繰り出し，お祭り騒ぎだった様子が伝わってくる。開票の結果，ポワンカレがライバルのパム── パムとコレットの夫ジュヴネルは親しい間柄だった ── を大差で破って勝利した。コレットは政治にはほとんど触れず，めかしこんだ女性たちの動きを追っている。フランスで女性に選挙権が与えられるのは 1945 年のことであり，女性たちはもっぱらアトラクションの役をつとめていたのである。

下院議会の傍聴（ル・マタン，1914 年 4 月 9 日付）

コレットは近くで，「ここは女が来るようなところじゃない」とつぶやく声を耳にしながら，傍聴席から半円形の議場を見おろす。そして，議員 3 名の演説の様子をスケッチする。コレットの筆は，演者の声や話し方，そのしぐさを詳述するが，議論の内容に踏む込むことはない。コレットとよく比較されるジョルジュ・サンドは，1848 年の 2 月革命に際して，共和主義者として積極的に動き，革命失墜後，身の危険を感じた人々をノアンにかくまっている。しかしコレットは，政治にはあまり関心を示していない。

国民議会議員選挙（ル・マタン，1914 年 4 月 30 日付）

4 月 26 日の日曜日に，下院の第一次議員選挙が行われ，その結果が新聞社のホールに張り出された。コレットは，パリの北から南から馳せ参じた人々が，興奮気味に当落を確かめる様子を伝えている。

ボノ団一味の逮捕劇（ル・マタン，1912 年 5 月 2 日付）

ルポライターのコレットは，三面記事的な事件現場も取材した。

4 月 26 日の日曜日に，コレットが取材のため，パリ郊外の現場にかけつけたこの事件の全容は，つぎのようなものだった[8]。

〈ボノ団事件〉

自動車を用いた強盗というのは，新手の犯罪だった。1911 年 12 月から 1912 年 3 月にかけて，盗難車に乗った武装集団が，パリを中心にして，金融機関などを次々と襲撃したのである。一味の領袖は，織工で，しかし工場を何度となく首になって社会への怨嗟を募らせていたジュール・ボノであり，彼の下に，やはり社会を恨み，その社会への報復手段として盗みも暴力も正当化する，「知恵袋」レーモンを始めとした七人のアナーキストたちが集まっていた。無政府主義を標榜して，警察はもとより銀行員や一般市民に対してまで発砲することをためらわない冷酷なボノ団に，世間は震撼した。政府も本腰を入れて対応に乗り出し，その結果一味のうちの五人が立て続けに逮捕され，1912 年 4 月にはついにボノが警官隊との激しい銃撃戦の果てに死に，翌月には最後の二人となったガルニエとヴァレが立て籠もった家ごとダイナマイトで吹き飛ばされる。逮捕された五人全員には死刑が宣告され，ある者は自殺し，ある者は特赦を受け，そしてある者はそのまま断頭台に上がった。

現場に着いたコレットは，男たちの人垣をかきわけ，── 女性はほとんどいなかった ── とにかく前に出て何が起きているのか確かめようと必死だった。しかし，もうちょっとというところで警官に押しとどめられてしまう。「ここから先は報道関係者だけ。プレスの人でも，スカートの人はご遠慮を。」「僕のズボンをお貸ししてもいいですよ，マダム。」と冷やかしの声が上がった。男装をして取材に駆け回ったサンドと違い，コレットはスカート姿を変えなかったらしい。そのうち，

大音響とともに煙やほこりがあたりにたちこめ，何も見えなくなってしまう。何が起こったのか，帰ってから聞いてみなくては，と思いながら現場を後にした，とコレットは結んでいる。

トゥール市で（ル・マタン，1912 年 6 月 27 日付）

コレットは，ある殺人事件の裁判を取材するために，トゥールまで出張する。

ギヨタン氏が自宅で死体で発見され，被害者の妻と，そのいとこの男ウサールが逮捕された。ウサールは夫人への思慕をおさえ切れずに，彼女の夫を殺害してしまったのだ。裁判の争点は，夫人が共犯か否かにあった。またもやコレットの筆は，被告と裁判官とのやりとりにみられる声の調子やしぐさの描写に集中する。後日ウサールには，20 年の強制労働が科されることになる。

強盗一味の裁判（ル・マタン，1913 年 2 月 23 日付）

コレットは，ボノ一味のうち，最後に残った逮捕者五名の法廷を傍聴した。コレットはここでも，傍聴席からみた被告たちの容姿，声，言葉づかい等をこと細かに伝えている。

飛行船試乗体験（ル・マタン，1912 年 6 月 13 日付）

飛行船クレマン・ベイヤール号の初飛行に，ジュヴネルとともに参加したレポートである。離陸の緊張，眼下に遠ざかるパリ，そして現れる緑の大地。ひとたび安定した高度に達すると，コレットは退屈気味となる。コンピエーニュの森に着陸したときの木立のふるえ，草の匂いなど，コレットは五感を通して読者に訴える書き手である。

気球体験（ル・マタン，1912 年 7 月 12 日付）

今度は気球の下のかごに乗って，パリから南東の方向へ，数時間の空の旅に出た。乗員五名は，風との一体感を味わった。少しショックを受けて草地に放り出されたものの，まずは無事に帰還した。

その他には，自転車競技トゥール・ド・フランスのゴール地点のルポ，ボクシングの試合，イギリス国王夫妻を迎えての歓迎パレードなど，人々の興奮と熱気を生き生きと切り取って記事にしている。

戦時下の動きを扱った『長い時間』を読み解くについては，当時出版界全体に検閲体制がしかれていたことを考慮しなければならない。開戦と同時に総動員令が出され，夫ジュヴネルもヴェルダンに送られた。開戦直後のパリのひとコマを，コレットは描いてみせる。

予備兵（ル・マタン，1914 年 8 月 26 日付）

総動員令の発令から一週間後，コレットが乗っていたタクシーは，警官の指示で，東駅に向かう兵士二人を同乗させた。これまで暇だったのに，あさって結婚式という時にこれだよ，と嘆く兵士。日常の中に急を告げる様子を報じている。

傷病兵たち（ル・マタン，1914 年 10 月～11 月付）

コレットは，負傷した兵士たちの収容施設となった学校で，三週間ボランティアとして働いた。人手不足の中で夜勤も買って出ている。月明かりの中で夜明けを待つ長い時間。重傷の兵士たちの姿に，1859 年のイタリア統一戦争に参戦し，左足を失った亡き父にも想いをはせる。意識は回復

したものの，頭部の損傷に耐えかねて，銃で命を断とうとして引き止められる兵士もいる。他方，手足を失っても，生きる気力を失わない若者たち。過酷な状況の中で働く看護師たちがうつ状態にならないのは，兵士たちの元気に支えられているから，とコレットは書く。

この年の12月，コレットは偽名を使って，パリからヴェルダン行きの列車に乗った。現地の下士官宅に身を寄せ，塹壕から戻った夫と二カ月来の再会の喜びにひたった。42万人の死者と80万人の負傷者を出す大量殺りくの舞台となるヴェルダンも，この頃にはまだ，夫や恋人を訪ねてきた女性たちの姿があった。非合法の旅だったが，コレットはヴェルダン近くの村や町も見て回り，廃墟の中でクリスマスを祝う子供たちのルポルタージュをル・マタン紙に寄せている。

戦時下では，前線は男たちの舞台である。コレットの記事は，銃後の人々の生活に向かう。戦地の夫からの便り，食料の確保，ドイツ製品の不買運動，ドイツ兵の子供を宿した女性たちなど，妻であり母であるコレットは，生活関連のテーマでいくつか短編を書いた。

1915年5月，イタリアが同盟国側に立って参戦すると，ル・マタン紙はコレットにイタリアの取材を命じた。季節は夏，冬のヴェルダンにくらべ，別世界である。太陽と海，陽気な人々を目の当たりにしながら列車でローマに到着。そこにはまだ，平時と変わらない市民の生活があった。戦闘地域への立ち入りは禁じられていた。コレットは観光客のように取材旅行を楽しむ。下町で食事をし，ノミの市をのぞく。7月にはベニスを訪れた。夜明けに敵機が爆弾を投下していく。近くの島からこれに応戦する大砲が大気をふるわせる。ホテルの部屋係が紅茶を運んできて言うには，「なんでもありません。敵が来たから追っ払ったまでです。」

コレットは『長い時間』について，時には没になった原稿もあったとしながら，後世に残したいようなものは何も含まれていません，と述べている。しかしながら，“戦時アルバム”ともいえる一連の記事によって，「彼女はまったく新しいジャーナリズムの形，叙情的ジャーナリズムjournalisme lyriqueを打ち立てたのだ」と称賛する声もある。優れたジャーナリストであるGaëtan Sanvoisinは，コレット80歳の誕生日の祝辞の中で，『群衆のなかで』をとりあげて，「フランスの偉大な作家コレットは，ジャーナリストでもあることを忘れてはならない」と述べた[9]。

コレット流取材スタイルが感じられるのは，戦時下のレポートよりも，『群衆のなかで』の方である。取材に当たっては，事件記者のように，事件の核心に迫る手法は取らない。事態の推移，事実の確認は，報道記者に任せれば良いのである。現場をひとつの舞台にたとえるならば，その場面，登場人物，観客たちの反応を描いてみせるのがコレットの記事である。観客を含む登場人物を描写する際には，まずよく観察すること，音や匂いも見逃してはならない，現場に居合わせた人のみが描ける臨場感を伝える，それがコレットの取材スタイルだった。クロード・ショヴィエールは，1928年から三年のあいだ，秘書としてコレットのもとで暮らし，コレットの伝記を残した人物である。小説執筆中のショヴィエールから原稿を見せられたコレットは，求めに応じてアドヴァイスした[10]。

> 「夫婦が子供のことを話している場面だけど，表現を少し穏やかにしたほうがいいわね。やりあっている姿を読者に見せるんじゃなくて，やりとりを聞かせるのよ。聴覚って，文学ではそれほど大事な感覚じゃないかもしれない。でもね，それなりの役目はあるものなの。まず大切なのは眼，2番目は鼻，そして3番目が耳。(……)」

コレットの創作の秘密はどこにあるのだろうか。「まず大切なのは眼」とは，対象をしっかり見ることである。形状，色彩，手触りなども見逃さない。視覚がとらえた情報をながながと描写した作家として思い浮かぶのは，バルザックである。コレットファンのひとりである，アンドレ・パリノはラジオ番組の企画として，亡くなる五年前の 76 歳のコレットにインタヴューした。そのなかでコレットは，バルザックについて述べている。「わたしはバルザックから生まれたの。6 歳のときから読んでました。（……）これまでずっとバルザックを身にまとってきたのです。お見せしてもいいけど，今もベットの下にあるのよ」[11]。

また聴覚よりも嗅覚を上位に置いている点に注目したい。コレットは香りの強い草花を好んだという。筆者はあるとき，一緒に散歩していたドイツ人女性が，街角の花壇を見て，「この色彩と香り，まさにフランス的ね」と話したことを想い出すのである。

4. 編集者コレット（1919–1925）

パリが爆撃を受けるようになった 1914 年 1 月から，コレットのル・マタン紙への投稿は中断した。社員を戦場にとられ，印刷もままならなくなった新聞社は，紙面の削減を余儀なくされていた。

終戦から 2 カ月後の 1919 年 1 月，コレットは 3 年ぶりにル・マタンに復帰した。戦場となった北東部の取材記事が，コラム「千と一の朝」への復帰第一号となった。6 月，コレットにもうひとつまったく新しい仕事がまわってきた。このコラムの編集を任されたのである。秘書付きの立派な仕事場と自宅との間を，公用車で往復する日々が始まった。誰に何を書いてもらうか，まずもって読者の期待に応えるもの，読者層を考慮しなければならない。また日刊紙として，単行本や雑誌にはない制約もある。曜日ごとに執筆者を入れ替える方式で，コレット自身が登場することもあった。才能ある若手を発掘することにも気を配った。大手日刊紙に書くことは，コレットのような“有名人”以上に，無名の作家にとっては大きな意味を持っていた。ベルギー出身のジョルジュ・シムノンは，何本かの原稿が没になったとき，コレットに言われた。「ねえシムさん，── 当時 20 歳だったシムノンのペンネームは，ジョルジュ・シムだった ── これいいんだけど，ちょっと違うのよね。文学的すぎなの。それさえ抑えれば良くなるわ。」文学なのに文学色を消せとはどういうことなのか。シムノンは考えた末，できるだけシンプルに書くようにした。この忠告は，生涯でもっとも有益なアドヴァイスだったとシムノンは述懐している[12]。コレットのおかげでシムノンの短編が採用されたとき，残念ながらコレットは，編集責任者を辞任していた。表向きは，忙しすぎて，小説を書く時間がとれないから，と言っていたが，1924 年の 2 月を最後に，書き手としてもル・マタンを退いた。この頃コレットは夫と別居中で，翌年離婚が成立することになる。

ル・マタンの文芸コラムの編集責任者を退任したコレットに，すぐに新しい仕事が舞い込んだ。前年『クローディーヌの家』を出版したフェランジ社が，シリーズものの編集を依頼してきたのである。コレット文庫 Collection Colette は，1923 年 10 月のレイモン・エショリエ作『夜』に始まって，1925 年 3 月までに，20 冊を選定した。その中には，コレットの腹心エレーヌ・ピカールと，クロード・ショヴィエールの著作も含まれていた[13]。

5. 映画・演劇批評への道（1914–1924）

コレットの映像との出会いは，かなり早い時期に始まっている。上述のように，1907 年のコレットとミッシーの舞台は，一大スキャンダルを引き起こした。しかしこれに商機をかぎつけた人もい

た。あるプロデューサーが，この作品を映像にしたらどうか，と持ちかけてきたのである。この企画は，ミッシーが表に出ることはしばらく控えるべきとの判断から見送られた。

コレットが映画批評に乗り出すのは，舞台を去ってから二年後の，1914 年のことである。手始めに撮影現場のルポルタージュ（ル・マタン，1914 年 3 月 19 日付）があり，遭難したスコット南極探検隊が残したフィルムへの賛辞（ル・マタン，1914 年 6 月 4 日付）が続いた[14]。ところがこの年の夏にふりかかってきた第一次世界大戦は，フランス映画界に決定的な打撃となった。1895 年にリュミエール兄弟が映写機を発明して以来，フランスは映画先進国の道を歩んでいた。1914 年に世界中で上映された映画の 90%がフランス映画だったことがそれを裏付けている。しかし戦中から戦後にかけて，その地位はアメリカに奪われてしまう。徐々にアメリカ映画が世界を席巻していくのである。

戦時体制になって二年，コレットは Excelsior 紙にアメリカ映画「チート」（フランスでのタイトルは「裏切り」）の批評（1916 年 8 月 7 日付）を書いている。特に，主演ともいえる，日本人スター早川雪洲の演技は，強く印象に残ったらしい。この頃はまだ無声映画だった。パントマイミストのコレットが，雪洲の沈黙の表現から多くを汲み取ったとしても，故なきことではない。

アメリカ映画「シヴィリゼーション」の批評は，週刊誌「ル・フィルム」の 1917 年 5 月 28 日号に掲載された。コレットが最初に「シヴィリゼーション」を見たのは 4 月初めのことで，ローマに滞在していた時だった。一カ月遅れでパリで封切られたこの映画に接してみると，いくつかの場面がカットされ，勇ましい戦闘場面が追加されているではないか。こういうことは起こりうる，仕方がないとコレットは書く。戦時下にあって，意図的に改編された戦争映画を評するコレットの筆は，慎重にならざるをえない[15]。コレットによる，「ル・フィルム」の映画紹介コラムは，この年の 7 月末まで 6 回シリーズとして連載された。

ル・マタンでコレットが編集の仕事についたのは 1919 年の 6 月であったが，この年の 12 月から，ル・マタンを去る 1924 年 1 月まで，コレットは演劇批評欄の執筆にも当たった。パリ市内の劇場では，週に 1，2 回，公開稽古の現場や舞台初日の客席に，オペラグラスを手にしたコレットの姿があった。

6. 劇作家・シナリオライターへの道（1907–1923）

1906 年に初舞台を踏んでから一年後，コレットは二幕からなる戯曲『友だち夫婦』*En Camarades* を書きおろした。この舞台は 1909 年の始めに，テアトル・デ・ザールで幕を開け，コレット自身が妻役を演じた。批評家はコレットの強いブルゴーニュ訛りを指摘することを忘れなかった。しかしこの戯曲を書いたことによって，コレットは劇作家協会の準会員に迎えられた[16]。

二度目の結婚を機に舞台を降りたコレットの関心は，映画に向けられた。コレットが最初に手がけたシナリオは，『ミンヌ』である。友人の女優ミュジドラを主演に起用し，1916 年 12 月にパリでクランクインしたこの映画は失われてしまい，「ル・フィルム」が伝える予告記事しか残されていない[17]。

1917 年 1 月，コレット夫妻はローマにいた。夫は，6 日から開催された連合国側の会議が一段落すると，帰国の途についた。他方妻は，パリから到着するミュジドラを待って，「さすらいの女」の撮影に，原作者として立ち会うことになっていた。「さすらいの女」は 1918 年 3 月，パリで公開された。

コレットがつぎに手がけたシナリオ『秘められた情炎』は，書きおろしである。主演のミュジド

ラは，雑誌「フェミナ」（1919 年 6 月 1 日号）でこの映画を紹介し，いくつかの場面の写真を添えている。この映画は 1920 年 4 月に公開されたが，残念ながら後世には伝わっていない。

2009 年制作の映画「シェリ」（「シェリ，私の愛しい人」の日本公開は 2011 年）の原作が単行本として Fayard から出版されたのは，1920 年 7 月初めである。コレットはレオポル・マルシャンの協力を得て，原作を三幕ものの戯曲（1921 年 5 月）に仕立てた。この頃コレットはミュジドラにあてて，この作品の映画化を考えていること，いくつか話はあるものの，まだはっきりしないと書いている。「シェリ」はこの年の 12 月，テアトル・ミシェル座で初演された。豪華キャストが人気を呼び，初日から 2 ヵ月余りで迎えた 100 回記念公演では，コレットが主役のレアを演じた。コレットはその後の地方公演でもレア役をつとめ，巡業は 1926 年まで続く[18]。「シェリ」が映画化されるのは，ずっと後の 1950 年を待たなければならない。

コレットのシナリオによるもう一本の芝居「さすらいの女」がルネッサンス座にかけられたのは，1923 年 2 月 3 日から 3 月 28 日までである。「シェリ」と「さすらいの女」のシナリオ執筆が認められて，この年の秋にコレットは，劇作家協会の正会員に昇格した。

7. 結　　び

コレットの最高傑作『シェリ』が出版された年，夫ジュヴネルは上院議員に選出され，政界入りを果たした。その同じ年にコレットは，レジオン・ドヌール 5 等勲章も受勲し，順風満帆にみえたが，この頃から妻は夫の不在をかこつようになった。事実，夫の心は妻を離れてただよい始めていた。1923 年に二人は別居し，50 歳にしてコレットは再び新しい人生に立ち向かうことになった。翌年の離婚を機に，ル・マタンとの縁も切れてしまった。1924 年の初めに，親友のエレーヌ・ピカールにあてて「朝の 8 時半から夜中の 1 時まで働いてるの。もう限界よ」と書き送りながら，一年半後には，16 歳年下の男性を射止めることに成功する[19]。元気を取り戻したコレットは，またもや仕事に邁進してゆく。その後はマネージャー役の三番目の夫モーリス・グドケに守られ，第二次世界大戦が始まるまで，私生活では穏やかな日々を過ごすのである。

注

（1） Thurman（2002）p. 191
（2） Pichois et Brunet（1999）p. 188
（3） *Ibid.,* pp. 201–202
（4） 河盛好蔵（1961）p. 242
（5） Bonal et Maget（2010）p. 15
（6） *Cahiers Colette* No 20（1998）p. 27
（7） Thurman（2002）p. 248
（8） 小倉孝誠・岑村傑（2005）p. 30
（9） Colette（1986）p. 1430
（10） Pichois et Brunet（1999）p. 360
（11） Colette（1996）p. 102
（12） Pichois et Brunet（1999）p. 313
（13） *Cahiers Colette* No 5（1983）pp. 71–84
（14） Virmaux, A. et O.（2004）pp. 285–289
（15） *Ibid.,* pp. 289–295
（16） Pichois et Brunet（1999）pp. 198–199

(17)　Virmaux, A. et O. (2004) p. 302
(18)　Pichois et Brunet (1999) pp. 302–304
(19)　*Ibid.,* p. 321 ; p. 336

参考文献

Bonal, G. et Maget, F. (2010) : *Colette Journaliste,* Seuil, Paris
Colette (1996) : *Mes vérités, Entretiens avec André Parinaud,* Ecriture, Paris
Pichois, C. et Brunet, A. (1999) : *Colette,* Fallois, Paris
Thurman, J. (2002) : *Secrets de la Chair, Une vie de Colette, traduit de l'anglais* (*américain*) *par Hélène Collon,* Calmann-Lévy, Paris
Virmaux, A. et O. (2004) : *Colette et le Cinéma,* Fayard, Paris
Colette (1986) : *Œuvres,* Bibl. de la Pléiade, t. Ⅱ, Gallimard, Paris
Cahiers Colette No 5 (1983), Société des Amis de Clette
Cahiers Colette No 20 (1998), Société des Amis de Clette
ハーバート・ロットマン，工藤庸子訳（1992）:『コレット』，中央公論社
小倉孝誠・岑村傑（2005）:『三面記事の栄光と悲惨　近代フランスの犯罪・文学・ジャーナリズム』，白水社
河盛好蔵（1961）:『フランス文壇史』，文芸春秋新社